

第60回図書館問題研究会IN指宿第2分科会報告

テーマ「民営化を考える～図書館に指定管理は似合わない」

参加者43名（発表者含）報告者 井上一夫 力丸世一 永利和則（報告順）

2013年6月17日(月)9:00～17:00 鹿児島県「指宿ベイテラス」

○今回の研究会で感じたこと

参加者は図書館関係者が中心であり、そのソフトについては日常的に関わっているという前提で、私は、建築・まちづくり・子育て（保育園）・景観・行政（国15年・地方19年・地方最後の5年にまちづくり計画を担当）・73才（昭和21年小学校入学の民主主義の第一期生）の立場から、私の今までの体験から武雄問題をはじめ、国内的に起きている事も含めて多面的（まとまりもなく）約2時間報告させていただきました。この稿では、その報告の一部と指宿&日常的に感じたことを中心にまとめました。この資料は、第2分科会を担当した図問研のスタッフへの報告・図友連への報告に使います。

会場の「指宿ベイテラス」には驚愕しました。あの悪名高い年金福祉事業団のグリーンピアのリニューアル施設でした。現在、「がん粒子線治療研究センター」等が加わり、宿泊施設も運営されていました。それにしても、どう見てもこの施設の目的・使い方が分かりません。地下1階地上4階、その中央部分に大きな吹き抜けがあり、これが無ければ面積は半分程度で済んだのではないかと、さらにその吹き抜けがあることで移動距離が長くなりルートも分かり難い、これはもうカネ（保険料）を使うために考えられたPJでしかない。と思いました。さらに、その施設がどこを掘っても温泉が出る（タクシードライバーから）、活火山的な山の山頂に建築されていたのです。

そのことから、建築物の「社会的耐用年数」と「技術的耐用年数」の話から入りました。このグリーンピアは、社会的ニーズもミッションもない社会的耐用年数0なのに、50年～100年の技術的耐用年数の施設を造ってしまった。私の図書館は教育100年の計画で考えられたものが、独断的政治・行政運営によりゼロになってしまいました。ミッションのないPJは、他に何か目的があるかもしれませんが。それから、多目的施設は無目的施設になるリスクがあります。ワンストップサービス・利便性を求め過ぎると、肝心なものを無くしてしまいます。

建築面から分科会会場の部屋を例に、部屋の「吸音設計」について少し触れます。相手の声が明瞭に聞こえ、そして静かに使えるのはその部屋に吸音設計が施されているからです。一般的には部屋の広さや仕上げ等が評価対象になりますが、その両方が満足していても使い難い部屋は沢山あります。部屋の壁・天井の適した場所に、吸音材を張ることで静かで使いやすい読書空間を造ることができます。特に子どもたちが使う空間には配慮が必

要です。少し子どもたちが騒いでも、静かに使える部屋づくりは可能です。

景観については、まちづくりの成果はその町の景観や風景に現出しています。ホッとシユックリくつろげる環境は、時間的（歴史）空間的（土地利用）に配慮した政策が進められている町です。武雄市はそのビジョンを明確にしながら、施設整備を進めて来ていました。そのことから、図書館だけを見るのではなく、図書館の在る空間をもう少し広く見てほしい・俯瞰してほしいのです。そうすれば、その土地の履歴などから図書館がそこに在る必然が見えてくると思います。図書館の評価は、もっと時間的に空間的に長く広く考えてほしいと思います。さらに、そのP Jがスロー（ゆっくり）で進めるP Jか、ファスト（速く）進めなければならないのか、の見極めが必要です。スロー政策の代表は教育政策と思いますが、それをファストで進めてしまったのが、今回の武雄市図書館P Jです。

その事からも今回の武雄市図書館P Jは、教育政策では無く商業のためのファストP Jと言わざるを得ないでしょう。

先程、武雄市図書館をプロジェクターで紹介しましたが、図書館建築の良し悪しは、その設計者（事務所）の能力・スタンスに尽きると思います。武雄市はその点大変恵まれ良い図書館建築が得られました。建築が完成した後に、その設計者の説明を現場が聞くことは殆どないと思いますが、それでは良い運用は出来ないような気がします。それだけ良い建築は深い設計思想によって造られているのです。その思想が現場に伝わらずに、そのまま進んでいくことは全体的に大きな損失につながると思います。私は建築を専門にしてきましたので、武雄市図書館の思想は在る程度理解できます。設計者は武雄の歴史やまちづくりの方向、周辺の土地の履歴や地域資源などつぶさに調査し、それをデザイン化しています。それが分かるだけに、今回その思想を無茶苦茶にしたことについて、その設計者に大変申し訳ない気持ちで一杯です。

今回の改修計画について、一人の建築家が関わっています。その設計意図を読んで驚愕しました。そこには「書物というのは人にとって一つの快樂。それを可視化するために、圧倒的なヴォリュームを備えた書庫を考えた」さらに「この書棚は奥に向かって傾斜が付けられ、さらには書架の落下を防ぐバーも渡されている。地震の際も書籍が降り注ぐことはない」と書かれていました。（「図書館が街を創る」から）そのために、蔦屋書店のマガジンストリートやスターバコーヒーコーナーが俯瞰できるように閲覧バルコニーを増築し、その壁に≒4階の巨大開架書架が設けられてしまいました。このようなハードを与えられた現場は、どのように対応できるでしょうか。利用者や作業員などの事は全く配慮されずに、ただ1階の商業スペースの装飾壁として配置されてしまったのです。さらに問題なのは、このバルコニーは行き止まりで一方向避難しか出来ません。加えて書籍が地震時に落

下しないと書かれていましたが、それは余りにも地震エネルギーを過小評価していると思います。このような図書館を運営せざるを得ない現場は、誰がどのように責任をとるのでしょうか？現場の責任を超えています。このような公共建築は、見たことも造ったこともありません。

「地方分権はバラ色ではない」と思います。「日本は天為の国、外国は人為の国」といいます。日本は自然災害大国で、自然との折り合いをつけながら国づくりをしてきました。外国は戦争で国づくりをしてきています。東日本大震災に見られるように、繰り返し自然災害に見舞われてきた歴史と、さらに今後はその状態が酷くなるような予想があります。

加えて急速な人口減少化社会に入っています。地方が自己責任で地域運営をする目途は無いと思います。地方切り捨てにつながることを危惧します。加えて、改革派首長といわれる人たちが、自由に地方政策を実行するようになれば、国の裁量が及ばない状況がつかれてしまうでしょう。図書館政策についても、あれだけ文科省は教育政策全体を構築しているのに（永利報告）、なぜ、地方自治体は実行しないのでしょうか。学校図書館に向けた総務省地方交付税措置は、道路やハコ類事業に消費されてしまう可能性があると思います。国が地方に、図書館のスタンダードやガイドラインを示しても、すでにそれに従わない自治体が大阪や佐賀で出始めているということです。

「官から民へ」その流れを変える必要があります。官が担う政策を峻別すべきで、その中でも「教育と子育て」は、公共・国の責任で政策実行しないと、そのツケはすべて弱者（子どもたちや経済弱者）に向い、長期的に国の弱体化につながるでしょう。

行政改革が言われていますが、どこが無駄でどこが必要なのでしょう？今の地方自治体の行政改革は、単なる「出先切」（公立病院や保育所や図書館など社会教施設など）になっているのではないのでしょうか？

出先は一番必要な住民サービスを、第一線・市民と直接かかわりながら日常行っています。本庁の職員が定時で帰る時でも、その仕事が続くことが常態化しているかもしれません。このような出先が株式会社化されれば、当然営利目的のために人件費を中心に圧縮が始まります。労働集約型の各出先は、一気にワーキングプア化し、住民サービスは低下していきます。

今、合理化を検討しなければならない場所は、いわゆる本庁といわれる職場かもしれません。この職場は職能的な仕事は少ないので、誰でも出来ると言えばそのレベルの仕事がかなりの部分を占めます。本庁はマネジメント部分を残し、他は指定管理に移す方向も検討すべきでしょう。

「図書館からメッセージが聞えません!」が、今回の私の指宿大会での結論です。

小林課長（鳥取県立図書館）永利館長（小郡図書館）の講演や報告を聞いて感じたのは、このようにアバウト？で、フットワークの良い（スママセン）、上司や部下を持ったらいいだろうなあ～と思いました。そのようなキーになる人材を持つ町では、図書館がメッセージを発し確実に市民の中に入っていくでしょう。それは、お二人が上下左右に多面的に動き、政策立案からその現場での成果まで、見届けていると感ずるからです。政策が立案され実行・改善と循環しているように見えます。そのキーマンの動きは、周辺を啓発しマンパワーを醸成し、持続可能な図書館運営が実現するでしょう。まずは、図書館自身がメッセージを発する事が必要なのです。

武雄で欠けていたのは、図書館長が校長OBの天下り先的に使われていたのではないかとことです。校長先生を経て市立図書館館長を歴任、個人的にイメージアップにはつながると思いますが、3年交代の図書館長が定型化してしまえば、現場はプランもプログラムも描く暇はなく、ルーチンワークの繰り返しになっていたかもしれません。さらに、その状態を教育委員会が放置していれば、今回のような攻撃に対してブロックも反撃もできません。その責任の過半は、私たち市民にもあります。今回、武雄市民は暴走・暴力的な行政運営に対して、一斉に引いてしまった状態が続いています。長年積み上げてきたPJも進行管理を怠れば、一朝にして崩壊するモデルだと思えます。ゼロから一枚一枚レンガを積むようなプログラムが始まりますが、そのPJのphilosophy(哲学)・plan(計画)・program(行程)の3Pから再出発ですが、その前段として図書館に対する本当の市民ニーズを高めていかなければなりません。

失ったモノの巨大さを、あらためて感じています。皆さんの図書館では、決してこのようなことにならないようにしてください。

最後に「武雄問題は武雄だけの問題では無い」ということですが、それは武雄みたいな愚かな町？はないと思いますが、今から出てくる可能性がゼロでは無いと思えます。既に、そのような動きが見え始めています。今の、革新首長と言われるメンバーを見ても、元総務大臣の片山先生の時代と、今は隔世の感じがします。少なくとも片山知事の時代は「住民福祉」を第一に考えていただいていたと思えます。が、今の革新首長と言われる人たちに共通しているのは、過去に学ぶことなくその評価もせずに、独断的に変えて行くということです。違う意見は無視した上にソーシャルメディアでバッシング、スピードアップしていきます。それを「改革」と言う名でメディアが伝え、さらに油を注いでいる状況があるように思えます。そのような状況を、市民レベルで止めることは無理でしょう。さらに、安倍首相のアベノミクスという名のイメージ戦略、そのような経済至上主義も今回の武雄問題に無関係ではないと思っています。

「蠅螂の斧」ご存知でしょうか？無力でも1人で戦う覚悟が無ければ、問題解決の糸口は探せないと思います。その1人が3人集まれば、最低減のチームは構成できます。スロー、ファストのPJを峻別して進めなければなりません。今、まさに立ち止まり・向き合い・永い目で考える、勇気ある人材が求められています。どこのまちづくりグループと交流しても「他所者・若者・バカ者」がまちづくりの中心と話しますが、武雄の場合は今のところその若者が「年寄」ということです。若者たちも、自分たちのエンターテイメントだけを求めているわけではないでしょう。市民が「半歩先の挑戦」へ動き出すのは、時間の問題だと思っています。

私は報告の最後で泣いてしまいましたが、それは一人で行き詰った状態の時に、全国から届いた応援メッセージの一つを読んだ時の感動が蘇ったからです。そのメッセージには、村上春樹さんのエルサレムスピーチから「わたしが小説書くとき常に心に留めているのは、高くて固い壁と、それにぶつかって壊れる卵のことだ。どちらが正しいかは歴史が決めるにしても、私は常に卵の側に立つ」そして、最後に「“武雄市の卵”を見守り応援しています。」と結ばれていました。号泣しました。そして、目の前の霧がスーッと晴れていきました。迂遠かもしれませんが「集い・知り・連携する」その緩やかさ、その広がり図書館づくりの本質かもしれません。

最後になりましたが、第2分科会担当の鈴木様をはじめ、カンパいただいた参加者のみなさまに、心からお礼申し上げます。

この果実を、武雄市図書館・歴史資料館の復権に向け有意義に使わせていただきます。今回、スタッフの皆さんが「武雄カンパ」に走り回っていただいたお姿に、大きな勇気と希望をいただきました。

今後の皆さまのチームワークと、ご活躍を心から祈念いたします。

ありがとうございました。

2013年06月21日

武雄市図書館・歴史資料館を学習する市民の会 代表世話人 武雄芳輔 井上一夫(文責)